

# 2020 読書メモ 6・7 月号

## エリック・バーガー著

# 『残酷すぎる成功法則』

## (飛鳥新社・2017年)

やなぎさわかつひろ  
柳沢克央 編

(信州・上田仮説サークル)

2019年6月22日(土), 6月例会用レポート

### ◇はじめに—

前回までの「読書メモ」と同様、サークルで発表することを目的とすると、読書がはかどるので、今回もこのメモを作成しました。自身のため、記録を残すことが第一目的です。みなさま、よろしく(適当に)おつきあい下さい。今までのものと同様に説明あり、引用あり、要約あり、感想ありで諸々が混交しておりますのでご注意を。(私物)と書き添えてあるもの以外はすべて屋代高校図書室蔵書。

### ◆エリック・バーガー著『残酷すぎる成功法則』(飛鳥新社・2017年)(私物)

よくある自己啓発本だが、「売り」は「エビデンス・ベースド」=「論拠が示されている」こと。考えてみれば、そんなことは当たり前のことなのだが、そうでなくてただの「印象」や「主観」で人生の成功についてこれまで語られてきたということである。それでは宗教と何ら変わらない。

内容は要約すれば「努力よりも外見の方が大事」「睡眠が大切」「時間の遣いかたが大切」といった、至極当たり前のもの。だが、これらが現代的なエピソードと軽めの語り口で示されているので、投資しただけの価値を感じさせてくれる良書。

### ◆おたとしまさ著『塾歴社会』(幻冬舎新書・2016年)(私物)

中学受験にはお金がかかる。一流国立高校の生徒たちは学校の授業時間中に塾の宿題をこなしている。先生たちもそれをとがめない、事実上、公認している。…という具合に日本の学校教育と受験システムは制度疲労を起こしている。すでに2016年にこれだったのだから、コロナ黒船来航後の日本の学校受験教育は一気に変革の時代へと流れてゆくだろう…と私は予想するが、大多数の受験が切実でない子どもたちには関係ないことなのかもしれないと思ったりもしている。世間は狭い用で広いのかもしれない。

◆田坂広志著『運気を磨く』（光文社新書・2019年）（私物）

要するに板倉式発想法の「ピンチはチャンス」「どちらに転んでもシメタ」「気の持ちようが大事」ということを説いているだけに過ぎない。面白かった。読後感は爽やか。

◆佐藤優著『50代からの人生戦略』（青春新書・2020年1月）（私物）

読みやすい。「残り時間」「働き方」「職場の人間関係」「お金」「家族関係」「自分磨き」の6章からなる。佐藤隆の自己啓発本。これからの社会は経済的にも楽でなくなるということをすでにコロナ前に見抜いて見事に戦略的に準備をする生き方を説いている。原形には古典の精読がある。中国の古典やマキアベリ、聖書がそれらである。佐藤氏はこれに現代的な装いを与え、魅力的に語ることに成功している。

◆秋嶋亮著『略奪者のロジック・超集編』（白馬社・2020年4月）（私物）

ジョージ・オーウェルの名作『1984年』『動物農場』に象徴される事態が、現代日本において潜在的に進行していることを仮説として与えてくれる本。一読の価値はある。種子法、森林民営化、水道民営化、カジノ法案、等々の法案が、日本からの収奪を目的とした組織によってあらかじめ企てられ、政治家はそれを実行する手段としてこき使われる存在でしかないことに気づかされた。

◆ユヴァル・ノア・ハラリ著『ホモ・デウス』（上・下）（河出書房新社・2018年）

2冊を圧縮要約すると下記のようなになる。

1. 科学は一つの包括的な教義に収斂しつつある。それは、生き物はアルゴリズムであり、生命はデータ処理であるという教義だ。

2. 知能は意識から分離しつつある。

3. 意識を持たないものの高度な知能を備えたアルゴリズムが間もなく、私たちが自分自身を知るよりもよく私たちのことをよく知るようになるかもしれない。

この三つの動きは、次の三つの重要な問いを提起する。本書を読み終わった後もずっと、それがみなさんの頭に残り続けることを願っている。

1. 生き物は本当にアルゴリズムにすぎないのか？ そして、生命は本当にデータ処理にすぎないのか？

2. 知能と意識のどちらのほうに価値があるのか？

3. 意識を持たないものの高度な知能を備えたアルゴリズムが、私たちが自分自身を知るよりもよく私たちのことを知るようになったとき、社会や政治や日常生活はどうなるのか？（あとがき・最後の部分）

…以上のように、本書の結末は非常に哲学的で深遠なそれである。コンピュータが現実を飛び越え、現実を置き去りにしていくような印象を持つが、具体的にどのような事態になるか、まだ想像がつかない。だが、現実には未来はもうすでに始まっているのである。予想できることも予想外のこともたくさんあるだろうが、つねに変化を楽しみに味わっていききたい。

#### ◆細谷功著『アリさんとキリギリス』（さくら舎・2016年）

板倉式発想法にちょっと似ていて、ユーモアと毒と超絶感覚が味わえる、軽いタッチの本。コロナ後に古くなってしまいう本が多いと思われる中、いよいよ魅力を増す味わいに富む。

要するに、イソップ童話では「怠け者」とされて、さげすまれる存在だった「キリギリス」的な人物にも光が当たる時代がやってきたということ。「地に足がついていない」「卒業せずに中退する」「直観的な生き方」「文句を言わずに新しい方法で勝手にやってしまう」「規則を守らずに、規則を作ってしまう」という生き方にも、一定の理解が得られる時代になってきた…というような斬新な論理が満載。常識が要らない、常識が変わってしまう時代になりつつある。このチャンスを生かせる可能性を持つ若者たちに知らせてあげたい本。

#### ◆立川談四楼著『落語家のもの覚え』（ちくま文庫・2020年再刊）（原著は『記憶する力・忘れない力』2010年刊）

カバー紹介をそのまま入力する。…なぜ落語家は数多くのネタを覚えられ、忘れないのか。落語家生活50年、厳しくかつユニークな談志師匠の下での爆笑

修行話をはじめとして、司会に必要な記憶法、講釈師との記憶法の違い等、記憶する方法、忘れない方法についてやさしく面白くつづる。文庫版にあたり自ら育てる高齢弟子たちの奮闘する姿を書き下ろした章を増補。意外な視点から実生活にも役立つ記憶法のヒントを詰め込んだ一冊。…「人間は入力だけではあまり覚えられない。映像化をうまく利用することや、筋肉を動かして出力することによって面白いように覚えられる」等、現代脳科学の最先端の本との一致が見られて面白い。

#### ◆中一夫著『学校現場かるた』（仮説社・2012年）

ある場所で仕事をするときに、空き時間がたくさんありそうだったので、持って行って読んでいたら夢中になった。1ページ単位でまとまった内容が完結するという構成は現代的で親しみやすく、時代のリズムに合っていると思った。言い回しは平易な中にも深い内容。ことわざ的に磨き抜かれたかるたの語句は極意を伝えてくれる磨き抜かれた鋭いものが多く、深く考えさせてくれる。また、かるた形式になっていると、自動的に自分が気になっていることについては目に飛び込んでくる印象が強く、とても効果的。石塚進さんの名文句「突撃ラッパは大けがのもと」など、知っていると知らないとは大違いのコトワザが満載。とくに、「そんなにムキにならないで、大人の対応をしようよ」と教えてくれるものが多いので、若い人たちに読んでもらうのもいいと思った。年をとった人たちは自動的に「ずく」がなくなるので、そんなに心配したことはないのだと予想している。

#### ◆丸山眞男著『日本の思想』（岩波新書・1961年）再読

名著。今回は「である」と「する」ことを読み直してみた。現代においても十分に示唆に富む古典的な魅力を持つことを再確認した。

引用して紹介する。

現代日本の知的世界に切実に不足し、もっとも要求されるのは、ラディカル（根底的）な精神的貴族主義がラディカルな民主主義と内面的に結びつくことではないかと。トーマス・マンが戦後書いたもののなかに「カール・マルクスがフリードリッヒ・ヘルダリンを読む」ような世界という象徴的な表現があります。マンの要請を私なりに翻訳すると右のような意味になります。すくなくともそれが、きょうお話しましたような角度から現代を診断する場合に私のいなく正直な感想であります。

……ラディカルな「精神的貴族主義」からも、ラディカルな民主主義からも、いずれも遠くなってしまった現代日本との印象を持っている。ピンチを活かして、国民が生き生きと生活できる社会の最高を目指す気持ちだけは忘れないようにと思って息をひそめる思いで生きている昨今である。昨日の陸上の北信大会で生き生きと躍動する若人たちの姿を見て、とても頼もしく思えたのは幸せなことである。〔2020年7月25日（土）昼，脱稿〕